研究ノート

開かれた学校づくり

── 実践と課題 ──

渡　部　計　二
教職課程センター

1　はじめに

1993年4月、京都府教育庁指導部高校教育課から城陽市立中学校教頭として異動を命じられ、その後、同市小学校校長として定年退職するまで13年間の公立学校管理職を経験させていただいた。その間は、非常に大きく急激な教育改革が進行し、その波に揉まれながらのみ込まれてしまわないように、配属された学校という船の舵取りをさせていただくという貴重な体験の連続であったと考えている。

中学校、小学校と校種はもとより、当然のことながら地域の特性をはじめとして配属された学校それぞれに抱える課題も異なり、異動のたびに新鮮な課題と直面しその解決に向けた教職員との連携・協力が求められることとなった。

教職員とともに「開かれた学校づくり」に奮闘した一管理職としての13年間の概要と特徴的な課題について、着任校種順に記述してみたい。

2　中学校における成果と課題

（1）自立・自律

教育目標の一つとして、また、生徒指導の基本的事項の一つとして掲げられる「自立」「自律」については、経験した三つの中学校ともに全教員が共通理解し、生徒指導主任を中心としてチームワークを組んで熱心に指導に当たっていた。

心身ともに大人への成長著しい時期特有の心の弱さを露呈する生徒が少なからずいる中学校時代であればこその、健全な大人への成長を心から願った先生方の指導・努力が本当に熱心に昼夜を問わず実践されていた。多感な時期の生徒は敏感にその指導の虚実をキャッチし、「誠実な指導」「本当に自分のことを考えてくれていると理解できる指導」に、自ら成長しようと努力する姿勢で応えていた。

生徒たちの自律を最も実感した例として、H中学校におけるノーチャイム実践がある。

教職員とともに、計画と検討を重ね、朝一番の予鈴及び最終学級活動後の合計2回のみチャイムを鳴らし、そのほかは一切チャイムなしの学校を実現した。校内の随所に時計を配置し、それを見て生徒たちは自分で時間の管理をすることにしたのである。それと同時に、職員室横のボードにクラス毎の翌日の授業内容を掲示し、それを見て生徒は授業で必要な準備物等、自己管理できる力も育成することを始め現在もそれは受け継がれている。授業内容の掲示をすることは教師たち一人ひとりの計画的授業進行に繋がるとともに、来校した保護者の方々にも見ていただくことになり、好感を持って受け入れられた。

Open Elementary and Junior High Schools Are Needed : Practices and Problems which We Are Now Facing

（2）夢や希望の語れる学校、進路指導

偶然ではあったが着任した3校の内2校で創立20周年を経験した。当然、記念行事も開催され、その準備の段階からPTA会長をはじめ多くの地域の方々と活動をご一緒させていただいたことは、当該校管理職としてのその後の活動に大きく役立つこととなった。

『地域に支えられた学校』を実感したのも、このような行事を通してであった。生徒の保護者や祖父母、地域の自治会長をはじめ地域社会のお世話をしていらっしゃる方々等、20年前の学校創立にご尽力された多くの方々の熱い思いや願いが込められ設立に至った経緯を拝聴する中で、地域の歴史についても学ぶ絶好の機会、管理職としての使命を改めて実感されられる機会となった。これに応えるべく自分のできることは何か、何をすればこの期待に応えることになるのか、大きな課題と向き合うことにもなった。

生徒たちは一人ひとり悩みを抱えながらも明るく元気に学校生活を送っているように見えた。しかし、自分の将来や人生についての長期的な展望や計画については、なかなか本音で語り合おうとしなかった。青年期特有の野望・大望などからは程遠い、ごく近い将来のことしか考えられない状況であった。社会の変化が余りに急激すぎるためか、夢や希望など問題外といったところであったのだろうか。

保護者の方々も、とりあえず高校に進学し、大学卒業後は出来る限り安定した職業に就いて…といった具合に、ステップは踏んでいるように見えるものの直近の目的をクリアすることで安心したいと願うパターンがほとんどで「わが子が何をしたいと考えているのか」「わが子の特性や能力はどのようなものと判断するか」など、こども一人ひとりの個性や能力を伸ばし人生に生かすことからは程遠いところで悩んでいることが多いと感じた。

しかし、学校行事等様々な機会を通じて保護者の方々と直接・間接にコミュニケーションをとっていき、根気強く丁寧に保護者を交えた生徒との懇談を続けるなかで、少しずつ学校や教員の熱意を理解していただくことができるようになり、生徒一人ひとりの人生を展望した進路指導へとつなぐことができるようになっていった。

三校目に赴任した中学校では、京都府教育委員会指定事業『社会人活用』を活用する機会に恵まれた。取り組んだ内容は、『選択理科』として地域在住の庭園造園業を営む方に環境問題を考えつつ植樹に取り組む活動と、いま一つは『選択体育』として講師に京都府立体育館インストラクターを招きエアロビクスを実施した。

選択理科の指導者としてお願いした方は、植物は気持ちを込めて手入れすることでそれに応えてくれることを生徒たちにおだやかに教えていただき、豊かな緑とともに豊かな心も育てていくことを教えていただいた。

選択体育では3カ年計画で毎年内容の違ったエアロビクスを実施し、生徒たちは3パターンの演技を身につけることとなり、その成果は毎年秋に開催の体育大会のオープニング・プログラム「全校生徒による準備運動」として定着、生徒たちばかりではなく保護者からも大好評となった。創立20周年記念行事の中でも、エアロビクスの発表の機会を設定したところ、演技者への応募が男女とも多数あり、生徒たちの意欲の現われとして喜ぶべきことであった。このことはPTAの会議や地域の方々の会合においても話題となり、また式典に参加してくださった多くの地域の方々、保護者からも大好評であった。

（3）保護者との連携

生徒一人ひとりの生活は、学級担任や教科担任をはじめとする学校教職員との関係だけで成立するものではない。成長を支援し合う点においては、その保護者との関係もきわめて重要になってくる。小学校の6カ年とは異なった保護者との協力・支援の存在が義務教育修了前の中学生時代には必要となってくる。

ほとんどの生徒が高等学校に進学する今日、

中学校においては、目的を持ち将来を展望した進路決定を生徒自らできるようにする指導をしなければならない。保護者の期待を十分に考慮しつつ、まわりの生徒たちに左右されることなく、自らの意思決定をしなければならない人生の岐路を迎えるのである。この時、深く考えないで判断をした生徒は、その後の人生において悔やむことになるので、学級担任は細心の注意を持って保護者と連携し生徒指導に当たる。

過去においては『こどもを人質にとられているので学校には何も言えない』といったことが陰で囁かれていた時代もあったが、生徒・保護者・学校の三者が膝を突き合わせ、しっかりと生徒の将来を見守り、どんな小さなことでも話し合い前進する姿勢こそが求められる。

幸いにも勤務した各中学校ともに『隠し事をせず、生徒を大切にし、何でも保護者と相談できる雰囲気を作り出すこと』を厭わない教職員ばかりであったので、管理職としては側面からの支援をし、安心して見守っていることができた。このような状況の中から、PTA 役員のみならず会員である保護者の多くの方々が学校を訪れる機会が増えてくる結果を見ることなり、職員室や校長室で親しく懇談する風景が当たり前のこととなっていった。

3　小学校における特徴的な課題

（1）家 庭 教 育

「家庭教育こそが教育の原点である」と考えていた小職は、「入学してくるほとんどの児童が家庭でのそれなりの教育を保護者から受けてきているものだ」と信じていた。しかし着任早々にそれは大きな間違いであることに気づかされることとなった。

共働き等、時代背景も大きな要因の一つであるとは容易に考えられるものの、本来ならば家庭において保護者から教育されるべき多くの事柄が見事に、しかも大きく抜け落ちている現状に気づかされたのである。最大の被害者はこどもたちである。

「家族とは」「家庭とは」「親とは」「こどもとは」「人間とは」「日本人とは」等々、教育の原点について再考させられた期間であった。

大切な「心を育てる教育」が家庭で疎かにされている現状を突きつけられ、悪戦苦闘した期間でもあった。

また、こどもが初めて体験する最も小さく、かつ最も重要な『家庭』における教育の重要さの認識については、保護者と教員と地域社会の連携で今後とも解決に導くほかないと考える。

（2）基本的な生活習慣

「早寝、早起き、朝ごはん」は当然のこと、「学校生活においては授業中は集中して先生の教えを学ぶ」、「学級活動や学年他、異年齢の友だちとの適切な活動をする」等多岐にわたる非常に多くの基本的生活習慣に関わる課題を学校（学級担任）が抱えさせられている現状を目の当たりにした。

基本的には家庭教育の問題であって、かつてはこれら基本的生活習慣を身につけさせることを学校教育に持ち込むことはご法度であったはずである。しかし今日では、基本的生活習慣の何かも分かっていない保護者も多く見受けられ、最も大切な「しつけ」さえもこどもたちに体得させられていない事例を少なからず経験した。学校教育には「こどもたちの教育」だけではなく「保護者への教育」という課題も併せて課せられてきたことになる。

（3）コミュニケーション能力

同年齢や異年齢のこどもたち同士で屋外で遊ぶことが極端に減少してきている現状からみても分かるとおり、こどもたち一人ひとりの他人と関わる力、言い換えればこどもの間に身につけておくべき社会生活をする上で必要な他人と関わる（関わろうとする）能力が育つ環境が劣化してきている。保護者はこどもたちを過剰なほど危険から遠ざけることを良しとし、その結果こどもたちは経験から学ぶことを知ろうとしない。こどもたちは「保護者の思いのままに動く動物」、極端な言い方をすれば「保護者の言

うことをよく聞くペット」と化してきている。その結果、自主性や自律・自立などとは程遠い、敢て言えば「幼児のままの精神状態で身体だけは成人風な人間」が増えてきている。がまんすることを学んでいない彼たちは、ほんの些細な障害が現れただけで、たちまちパニックに陥り誰彼となく当り散らすことでしか自己表現できない。

生きていくということは様々な社会に属し、その中でお互いに人間同士の関係が生まれ、よりよい生活環境を創り出しながら人間性を高め合うことであるはずである。しかしその基本となる人間としての能力が育っていない現状を重大な課題として認識し、その打開策を講じる必要がある。教師だけではなく、保護者や地域の方々との強い連携がここにも重要視されるところである。

（4）自己表現

幼い頃から読み聞かせや読書に親しませ、語彙を増やし、適切な自己表現方法を身につけさせる必要がある。

生まれて直ぐの赤ちゃんは自分では何もできないため泣くことで自己表現し、両親、特に母親は、その泣き方で赤ちゃんの欲していることを察し対応してやる。成長するに従いことばで自己表現し家庭という最も基本的で小さな社会をスタートとして次第に大きな社会に属し対応していく。ことばによって属する社会のメンバーと相対しながら自己表現し合い、相手の言葉にも十分耳を傾け新しい考えに出会い成長していく。

言葉が話せるようになってからは、こどもたち一人ひとりの考えを言葉で表現させ、まわりの大人たちはしっかりと聴いてやる環境を多く作ることが必要である。

（5）素直なこころ・豊かなこころ

幼い子どもたちの目は澄んで輝いている。その瞳をやがて曇らせ歪んだ心にさせてしまうのは大人たちの責任であると小職は考える。

「自分さえよければ他人のことは顧ずともよい」「他人は疑ってかかれ」等といった淋しい考えを大人たちから植え付けられるからこそ、それはこどもたちの中に住みつき心を蝕んでいるのだ。

素直なこころの持ち主は、他人から様々な教えを受け入れ成長を続けることができる。豊かなこころのもち主は他人に愛を与え、それによって人を幸せにすることができる。様々な社会において、そのように信じて教育された人間が溢れれば、どんなに幸せな生活を送ることができるだろうかと考え教育にあたるべきである。

4　開かれた学校づくりへの取組み

小職が校長研修会に参加していた当日に発生した大阪教育大学附属池田小学校における不審者侵入及び児童生徒殺傷事件は、全国に大きな後遺症を残すこととなった。それまで徐々にではあるが学校教育活動が保護者・市民の方々に公開、理解・浸透されはじめていただけに、開かれた学校づくりの進行に大きなストップがかかったことになり、その結果、学校は不振者侵入防止の名目で門扉が閉ざされ防犯カメラに監視される今日の現状を作ることとなった。その学校に児童生徒を通わせている保護者ですら学校が遠い存在となったに違いない。

反面、危機管理意識の高揚という点については、教職員・保護者・地域の方々にその意識を芽生えさせ安全な学校づくりに邁進させるよい転機となったとも言える。

しかし、地域に支えられ、地域の人々の熱い思いと力によって創られた学校である。「このままでよい」と考えているはずはないと思った小職は、事件後、地域の各種会合に可能な限り参加させていただき、地域の方々との話合いを積極的に重ね、期待や要望を現実に結びつける作業に着手した。頼りがいのある地域社会の人たちは「現状をよしとはしていない」との思いを声にし、「自分たちの創った学校への協力」を申し出てくれるようになった。地域の貴重な人材発掘と積極的な活用による『地域に根ざし

密着した学校づくり』の第一歩である。

学校公開を発案したところ、「学校参観日には行きにくかったが、それなら！」と真っ先に賛同していただいたのも地域の指導的立場の方々であった。大賛成をしていただき意を強くし教職員の協力も得て学期に１度は連続３日間の学校公開を設定することとなった。それまでの１回１～２時間だけの参観日では、保護者の方々も日程を合わせてもらうことが困難な場合もあったが、公開期間が長くなれば保護者揃って、あるいは祖父母、親戚の方々一緒の来校も可能となり、参観率は倍増し好評であった。長時間の児童の実態を観ていただくことも可能となったことについては特に保護者から賛同を得た。もっとも教職員は緊張する期間が長引くため大賛成とばかりは言っていられなかったが。地域の方々の笑顔に見守られながら初回の学校公開は終了し、その後改善をしながら定着した。近隣の学校にも学校公開日の設定は波及し、地域全体に定着するようになっていった。

学校評価についても外部の方々の協力を要請し直ぐに取り入れた。学校評価委員の方々からは、今、改善を必要とする点は何かについて率直なご意見を頂戴し、直ぐに着手できることから改善をしていった。管理職の視点だけでは見落としてしまいがちな点についても、はっきりと進言していただけたことが大変役に立った。

定年退職を控えた最後の着任校での最も印象深い取り組みは、自校教職員が小職を評価するいわゆる『管理職評価』の実施である。

教育委員会から通知されていた『教職員評価』本格実施の２年前、校長会で先進校視察研修の機会があり、そこでは県下の全校で管理職評価をも実施し教育委員会に報告が上げられていることを知り、帰校後早速自校でも取り入れ実施をしたのである。

日頃から教職員の協力あっての管理職であるといい続け教職員との連携を密にしていただけに、ほとんど反対もなく実施することができた。５項目ほどの簡単な評価ではあったが、二年後に始まる教職員評価の前兆としてタイムリーに導入できたと自負している。校長会のメンバーの中には、教職員評価実施について過敏な反応を示していた者も多く見受けられたが、前述のように、小職の場合は「日頃からの教職員との良好な信頼関係の構築の必要性」を立証できたものと確信している。この件については、後の校長会で発表をさせられ話題にもなった。

5　おわりに

要領が悪くスタンドプレイなどと縁遠い自分であることが自分自身十分分かっているだけに

「何事にも、どの人にも真心を持って誠実に対応する」

「嘘をつかず真摯に生きる」

をモットーとして生きてきた姿勢を崩さず、自分に正直に管理職の仕事にも当たった。他人からすれば、その結果は十分に満足していただけるものばかりではなかったかもしれないが、少なくとも地域の方々からの信頼を得る学校に変わっていったことは実感できたこと、教職員の方々からは常に協力的な反応が得られたことは事実である。

自分としては、学校は信頼関係の上に成り立つ社会の一つであるということが分かっただけでも、教員を続けてきた財産であると考えている。

学校教育においては、児童生徒を中心におき、こどもたちの成長を第一に願う教育課程を編成し、指導する教師たちの英知を結集した取組みを実践することが公教育に求められる最も基本的な事項であると考える。

様々な課題が山積する今日の学校教育であるが、人間同士の社会の中で営まれる行為（教育）であることを考えれば、解決できない問題はほとんどないといえるのではないだろうか。全ては未来のよりよい社会の形成に繋がる今であることを覚え実践すれば、必ず結果がついてくるはずであると信じ、今後も教育実践を重ねていきたい。